

1.13. 後書き：「ウィーン便り」を終わるにあたって

日立製作所定年を迎えるのを前に、勧められて始めたこのシリーズも IAEA 定年のこの三月で完結することにした。平成十二年の二五〇号特集号から二年半、よくも書いたり、よくも載せたり、よくも読んでくれたり、が正直な感想である。「国連も職場の選択肢と考える後輩への参考に」の最初の意図が叶ったかどうか。あとに続く人のあることを期待したい。

先ず、多くの（と思いたい）読者に感謝。一時帰国の折りに会った旧友の反応、「読んだ」との年賀状での一言や手紙、さらには「ばんぼんたんぴょう」や「ばんぼんひろば」に短いながら言及されるのを見て読者との接点を感じた。

次に、編集部（特に畝崎さん）に感謝。配図や文章構成への気配り、丹念な校正、綿密なスケジュール管理と筆者を励ます温かい言葉。遠い地にある私に「今も自分は日立の一員」との臨場感を届けてくれた。

最後に、自分自身。読み返してみてもそれぞれの記事の素になった情景を生き生きと思い出す。本文にも書いたが、充実したこの七年半の IAEA 生活で、一応心身健康な私的な環境も含めて「終わり良ければ全て良し」「今が人生最高」と職業人生を振り返っている。それが極楽とんぼならそれでも良い。だからと言って「これからは最高点から下るだけ」と暗がる訳でもない。IAEA 定年後の帰国時期、帰国後の生活形態も未定だがいろんな可能性があるように見える。それは、人生航路の行き先に眼を輝かせていた高校生時代に匹敵するような気分である。大きな相違は、「何もしない」選択肢が今回は有り得ること。何れにしろ、「華の中年（でおこがましければ老年）人生」が待っている。残された時間は短いとも長いとも言える。楽観的でいたい。